様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６３４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０２４６

研究課題名（和文）テキスト面からみた春本研究…戯作者と春本

研究課題名（英文）Textually-based study of shunpon: shunpon and writers of popular fiction

研究代表者
板坂　則子（ITASAKA, Noriko）

専修大学・文学部・教授

研究者番号：３０１３４２６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：『袋法師絵詞』の伝本を調査し、古態とその変遷を明らかにした。
江戸期に最も多量に出された春本として「文のはやし」を挙げ、総合的な研究を行った。「文のはやし」は総称で、頭書に性交に纏わる具体的な知識、下部に艶書往来が載る、往来物形態の春本である。戯作者（げさくしゃ）が関わった春本から曲亭馬琴を取り上げ、「曲取主人（きょくとりしゅじん）」名で書いた喜多川歌麿『多歌羅久良（たからぐら）』の付文や、『南総里見八犬伝』や『三七全伝南柯夢』などの春本化作品を紹介・考察した。

研究成果の概要（英文）：The surviving copies of 'Fukuro Hoshi ekotoba' were investigated and as a result it proved possible to clarify the nature of the early form of the text and the changes it subsequently went through.
A comprehensive study was carried out on 'Fumi no hayashi', the shunpon of which the largest number of copies was produced in the Edo period. 'Fumi no hayashi' is the generic name and it is in fact a shunpon that takes the format of an ohraimono (elementary educational textbook), with concrete information about sexual activity in the upper register and erotic correspondence in the lower register. The role of Kyokutei Bakin as a gesakusha (writer of popular fiction) who was also connected to the production of shunpon was considered, and a detailed study was carried out of "Takaragura', a piece of writing by Kitagawa Utamaro, who wrote under the name of Kyotutori Shujin, and of shunpon versions of works such as 'NansoSatomi Hakkenden' and 'Sanshichi Zenden Nanka no Yume'.

研究分野：日本文学・文化

キーワード：戯作　春本　曲亭馬琴　曲取主人　艶本絵巻　文のはやし

１．研究開始当初の背景

（１）江戸期の春画研究は、ここ十年で大きく進化した。殊に 2013 年にイギリス・大英博物館で行われた「sex and pleasure in Japanese art」展の成功は、春画が日本固有の文化として誇れるものであることを大きく世に知らしめた。これを受けて 2015 年には東京・永青文庫で「春画(Shunga)展」が開催され、20 万人以上の入場者を得、さらに 2016 年には京都・細見美術館で「春画展　世界が先に驚いた」が開催され、ここでも多数の入館者が話題となった。これらの展示はマスコミにも大きく取り上げられ、アカデミックな雑誌や講演、論文も多く出て、一見、春画は世に受け入れられたかのように思われる。しかしながら、実際には日本での展示は会場探しが難渋を極め、それらの研究はいまだ様々な障害に包まれている。

（２）それ以上に手が付けられていないのが春画と共にこれらの会場に並べられた春本の研究である。春本は、豪華な口絵に笑いを主とした軽い付文を付け、三冊本形態をとる浮世絵師主導の「春画絵本」の他に、戯作の各ジャンルに於いて、それらの装訂をそのまま用い、内容や文章形式もそのジャンルの特徴を持つ、通常の戯作本同様の春本が、数多く出ている。これらは著名な戯作者や浮世絵師も関わっているが、その研究はほとんどなされていない。これらの対象となる春本の存在自体が、いまだ多くの研究者にとって未知のものとなっているのが、現状である。

２．研究の目的

春本の歴史を主にテキスト面から考察し、戯作・戯作者と春本の関わりを見ることで、江戸期の文化の在り方を捉え直してみたい。テキスト面から春本はどのように作られ、どのように享受されたかを考察することで、これまで感覚的な面を重視して語られてきた江戸陣と春画・春本の関わりが、より実証的・論理的な側面から考察されよう。

３．研究の方法

（１）春本資料を各所蔵機関（国際日本文化研究センター、立命館アートリサーチセンター、大英博物館、London 大学 SOAS、他）で調査し、戯作に関わる春本中心に資料を蒐集する。

（２）春本の嚆矢とされる平安末期から中世に掛けて作られた三本の艶本絵巻(『小柴垣草紙』『袋法師絵詞』『稚児草紙』のテキストならびに画像研究を行い、後世の伝本内容を整理し、その発生事情を考察する。

（３）江戸後期に於いて最も多く享受された春本として「文のはやし」と総称される艶書往来を取り上げ、それらの諸本研究、時代による変遷、読者や販売などの状況を研究、発表する。

（４）著名な戯作者の書いた春本、戯作の人気作品を元に作られた春本を集め、研究を加える

（５）上記の研究成果をホームページに発表する。

４．研究成果

（１）2014 年度を中心に『袋法師絵詞』の現存する伝本を調査し、諸本比較を行った。これによって、伝本ごとに内容にばらつきがあった『袋法師絵巻』の古態がどのようなもので、どう変遷していったのかを系統立てることができた。また、本作品の最期に登場する尼御前が、古い伝本群では高貴な身分として描かれていること、比較的新しい伝本群では女房たちがやや積極的になることなどから、性に対する禁忌感が失われたことで、好色物に変容していく過程を明らかにした。

また 2015、16 年度には『稚児草紙絵巻』を中心に調査作業を行った。『稚児草紙絵巻』は、早くから存在は知られていたものの、ほとんど研究されずにいた。醍醐寺本に「元享元　六十八 書写訖」の奥書があることは指摘されていたが、作品の成立時期や背景については、従来ほとんど検討されてこなかった。2015 年度の大英博物館本『稚児草紙絵巻』の調査などから、『稚児草紙絵巻』第一話に１３世紀前半に実在した仁和寺御室の名前があることが分かり、本作品が元享元年（1321）以前の成立である可能性が高いと考える。2016 年度に行った「稚児」ものの御伽草子の調査結果を取り入れ、『稚児草紙絵巻』を中心とした論を発表し、それによって既に発表済の『小柴垣草紙』を含めて三部の艶色絵巻の総合的な研究とする予定である（井黒）。

（２）江戸時代中後期に於いて、最も多量、かつ広範囲に享受された春本は何か、という課題を立て、「文のはやし」系の艶書往来をその答とした。「文のはやし」系春本とは、下部に艶書(恋文)を載せ、頭書部分に性交にまつわる実用的な知識が、本によっては小さな挿絵入りで列挙されるという定型を有した、往来物形態の春本である。書名は『文のはやし』『文の枝折』『文のゆきかひ』など近似したものが多く見られるが、圧倒的に『文のはやし』タイトルが多く、他のタイトルでも江戸期の地方書肆の目録などには「文のはやし」と載ることから、「文のはやし」系春本と総称しておく。これら「文のはやし」書は、その需要の多さから改題、改刻版が非常に多く、江戸後期から明治初期に掛けて広く頒布された。その発行の契機となったのは十返舎一九作の『文しなん』と、それに次いで行われ多くの改刻がなされた陽起山人（溪斎英泉の隠号）作・画の『文のはやし』である。2015 年にはこの二作を詳しく分析し、一九作『文しなん』の刊行期を一九が往来物を盛んに出していた文政六～八年頃と推定した。陽起山人作『文のはやし』は数多くの異板を持つがその改刻経過を追った。艶書部分では、一九『文しなん』で一組の男女の出会いから結ばれるまでの艶書が並べられていたのに対し、陽起山人

『文のはやし』では遠方に離れた二人が別れを選ぶまでが艶書で示され、さらに頭書ではより性的な刺激を強めた話題が並び、読み物としての戯作化が進んでいることが伺える。なお、艶書部分のみ、翻刻も掲げた。
次いで 2016 年には、「文のしおり」系春本として、板坂が十年ほどを掛けて蒐集した約 50 部の作品に加え、国文学研究資料館、立命館アート・リサーチ・センター、専修大学図書館向井信夫文庫所蔵の 20 余部の計 70 余部を分析し、その中で多く行われたものを刊行の年代順に第十類まで分析紹介した。
本報告ではスペースの関係から、頭書部分は第 1～第 2 項目まで、艶書部分は頭書の書き入れ方式と第 1 項目までを載せておく。

（頭書部分）※元表では第 1～第 16 項目まで。

№	書名	作・画	1	2
第一甲類	文しなん	一九作、麿丸画	恋のみちびき2オ	口上（4ウ～）
第一乙類	文しなん	為山作	色事のできる伝（2ウ～5オ）	口上(5オ～
第二類	文のはやし	陽起山人作、英泉画	はじめて文をやるときのこゝろえ（3ウ）	淫婦の目利しやう（5オ）
第三甲類	恋の山ぶみ　文の枝折		交合心得方2ウ	閨中の心得6ウ
第三乙類	恋の山ぶみ　文の枝折		女大学1/2ウ「婬男亭好成著」（文政6頃）	娘を口説伝8オ
第四類	艶道痛言　ふみのゆきかひ	女好庵主人	男女和合の事1オ	年ゆかぬ娘をくどき落す伝4ウ
第五類	続文のはやし	千摺庵かく丸作	男女一代心得の哥2ウ	女に文のやりやう10ウ
第六類	ちらしの千話文（合綴本）	大陰山人	夫婦和合の妻1ウ	淫婦の相を知事6ウ
第七類	新はん　ふみのはやし	吾妻雄兎子	交合の始り　附いろ／＼の法	五勢之要法（※性交のしかた）
第八類	文の文庫	書淫欄主人述	はじめて文をやるときのうらない2ウ	女にはやくおもひつかゝ秘伝3ウ
第九類	艶道文の真砂	艶道文屋	艶道龍壺伝1オ	
第十類	恋の山ぶみ　文の枝折		末摘花	八曲之次第

（艶書部分）※元表では第 19 項目まで。

№	書名		1
第一甲類	文しなん	連綴体、散らし書き。ルビ付き。	きつと色事のできる附文（2オ）
第一乙類	文しなん		
第二類	文のはやし	連綴体、散らし書きではないが、かなり縦に上下あり。ルビ付き。ルビなし。	はじめてのつけ文（3ウ）
第三甲類	恋の山ぶみ　文の枝折	連綴体だが散らし書きではない。ルビ付き。	はじめてつけ文2ウ
第三乙類	恋の山ぶみ　文の枝折	読みやすいようにほとんど連綴にしていない。散らし書きはない。ルビ付き。	はじめてつけ文
第四類	艶道痛言　ふみのゆきかひ	連綴体、散らし書きではないのと、散らし書きで読み順番号付きが混在。ルビ付き。	男より女へ始めてやるふみ1オ
第五類	続文のはやし	連綴体、一部、ちらし書き。本文ルビなし。一部の手紙題のみルビ付き。	はしめて遣す文2ウ
第六類	ちらしの千話文（合綴本）	連綴体だが散らし書きではない。ルビ付き。ルビなし。	はじめてつけ文3ウ
第七類	新はん　ふみのはやし	読みやすい縦に連なる字で散らし書きではない。ルビ付き。	初て思ふ女のもとへ贈る文
第八類	文の文庫	連綴体だが散らし書きではない。ルビ付き。	娘の許へおくる文2ウ
第九類	艶道文の真砂	連綴体だが、散らし書きはしていない。ルビ付き。	見初たる女におくる文1オ
第十類	恋の山ぶみ　文の枝折	連綴体、やや散らし書き。ルビ付き。	見そめて娘におくる文2ウ

これら「文のはやし」系春本は、中本一冊、多くは藍色系無地表紙、丁数はおおよそ 30～45 丁ほど。半丁の序文と見開き一、二面の口絵、墨摺の中本というほぼ定型の書誌事項に収まる小冊子である。作者は十返舎一九、山々亭有人、松亭金水（女好庵主人）、梅亭金鵞（吾妻雄兎子）などの戯作者の他に、溪斎英泉（陽起山人）、歌川国富、恋川笑山（玉廼門）などの浮世絵師がいる。内容的には、頭書部分には中世の曲直瀬道三の養生書『黄素妙論』の影響が受け継がれ、「交合の奥伝養生の神術」（『黄素妙論』）を伝えるという基本姿勢を持つ。下部の艶書は時代が下るに従って実用書というよりも読み物として楽しむ戯作化が進む。書き入れなどから読者は江戸を中心に北関東から関西まで各地に散らばり、その価格もいくつかの資料から推定される。江戸期に於いて最も多く読まれた春本は、このような実用的な指南書であった。
またこの中の第四類『艶道痛言　ふみのゆきかひ』の頭書中の一文は川端康成作『眠れる美女』とほぼ同趣向の内容を持つことを指摘し、さらに『眠れる美女』の影響作として知られるマルケス『わが悲しき娼婦たちの思い出』を、「養生法」としての性行為から読み解いたが、本稿はドイツの日本学研究者の作るネット上の雑誌に発表している。
（３）戯作者の多くは春本にも筆を取っているが、その場合、隠号を用いることが多い。たとえば「佐彌比古（さねひこ）」は柳亭種彦、「好亭山人」は式亭三馬、「陽発山人」は十返舎一九、「嬌訓亭主人」は為永春水、「慕々山人」は仮名垣魯文、「腎虚亭」は振鷺亭、「長命館主人」は山東京伝の隠号である。そして曲亭馬琴は「曲取主人」という隠号を用いるが、その「曲取主人」はすぐに花笠文京が後を継いでいる。すなわち「曲取主人」作の春本は，作者が馬琴と文京双方の可能性があるが、後者の例が圧倒的に多い。その他、馬琴著作が他の作者によって春本化されたものも、『新編金瓶梅』を用いた『婬篇深閨梅』のように見られる。これら馬琴に関わる春本の中で、まず喜多川歌麿画の『多歌羅久良』中の曲取主人による付文が曲亭馬琴本人のものであることを証明し、さらに曲取主人の名前で出る『恋のやつふじ』（『南総里見八犬伝』の春本化作品、内題は『男壮里見八見伝』）や『花のにしき』（『三七全伝南柯夢』の春本化作品）などから、これら人気作の春本への転化方法、さらに文京による曲取主人名での春本作品（『筑紫琴』他）の研究を進めている。これらは作品の存在自体が知られていないものが多く、まずは翻刻紹介から行いたいと考えているが、性的な内容を含む春本であることから紀要等の雑誌での公開が難しく、いまだ発表をしていない。今後、研究書として書籍のかたちでまとめることを考えている。
（４）これまで行ってきた戯作と春本に関わる研究を部分的に用いて、江戸期の恋愛の変遷を追って江戸期文学を読み込む内容の書

『江戸時代　恋愛事情　若衆の恋、町娘の恋』（朝日選書 960、全 310 頁、2017 年６月刊行予定）を書いた。

第一章	仮名草子に描かれた男の恋
第二章	『男色大鑑』に見る武家と歌舞伎の若衆
第三章	性愛はどう描かれてきたか
第四章	春画・春本から探る若衆をめぐる性愛
第五章	戯作に見る色男の条件
第六章	女性の身体、男性の身体
第七章	変身する少女
第八章	江戸の女子力、交錯する性

の全八章から成るが、その中で第三章、第七章、第八章では戯作とその春本化作品、さらに平安期から春本の歴史などを取り上げている。ただし、これらは一般向けの書物となっており、具体的な作品翻刻や、戯作者中心の作品追求は行っていない。

（５）本研究に関わって板坂が蒐集してきた春本類、ならびに「文のはやし」系春本についての研究成果をホームページ公開した、http://www.hi-ho.ne.jp/itasaka/2017shungahp/top.html

「戯作と春本研究」と題した HP は、「艶書往来」（「文のはやし」系春本研究結果）において 55 作品を、「関連書」（「文のはやし」関連書紹介）では、艶書のみの作品や女訓書のパロディ春本など 24 作品を、「戯作と春本」では板坂所蔵の 157 作品の一覧を掲げている。いずれは画像を付けていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

①井黒佳穂子「『袋法師絵巻』伝本の変遷」（『浮世絵芸術』171 号、査読有、2016、5―29）

②板坂則子「江戸期の養生法と川端康成『眠れる美女』、ガブリエル・ガルシア・マルケス Gabriel José de la Concordia Garcia Márquez『わが哀しき娼婦たちの思い出』（Memoriad mis putas tristes）」（Bunron№3、査読有、2016、20―47）

③板坂則子「艶書往来「文のはやし」考」（『近世文芸　研究と評論』90 号、査読有、2016、54―74）

④板坂則子「一九『文しなん』と陽起山人『文のはやし』附　往来部分翻刻」（『専修国文』97 号、査読有、2015、1―56）

〔学会発表〕（計１件）

①井黒佳穂子「『袋法師絵巻』伝本の変遷について」（中世文学会、2014 年 5 月 24 日、早稲田大学総合学術情報センター、東京都）

〔図書〕（計１件）

板坂則子、朝日選書（朝日新聞出版）、『江戸時代恋愛事情　若衆の恋　町娘の恋』2016、310p

〔その他〕

ホームページ等

「戯作と春本研究」

http://www.hi-ho.ne.jp/itasaka/2017shungahp/top.html

６．研究組織

(1)研究代表者

板坂　則子（ITASAKA Noriko）

専修大学・文学部・教授

研究者番号：30134266

(2)研究協力者

井黒　佳穂子（IGURO Kahoko）

国文学研究資料館・古典籍共同研究研究事業センター・特任助教

研究者番号：90743104